

学問と大学

関西大学工学部 応用化学科 井本 稔

私は「応用化学徒」として一生をすごしてきた。それも8年半の会社づとめを別にして、ずっと学校の研究室であった。もはや工学部の教師としてしか考えられない習慣がついてしまっている。そこで学問ということとは何か、と考えても、自分のすごしてきた年月からのことのほかは理解できないのかもしれぬ。そのことをお許しねがわねばならぬが、学問というものは人間がいままで積み重ねて来た「知識の系統的な集積、と言っていいたろう、と思う。そして学問をする、という実践的な意味をもつ言い方にすれば、それは「従来[●]の知識の体系を理解した上で、その上に何かをつみ重ねる」という定義になるだろう。

そういう学問を身につけるには大学がもっとも便利だ。知識の大系を身につける、といっても程度[●]の上下がある、などと言うのではない。現在の最前線の、あるいは最高の、と言ってもいい、どこまで来ているのか、という所までのことを言っている。そうでなければ一歩先に出ることはできないのだから。

その大学には戦前には「国家のための」学問があって、人間のための学問は無[●]いと言われた。たしかに大学の封建性は大学を息苦しいものにしていた。しかし戦後、占領時代がすんで、次第に大学には民主主義が定着するようになった。それは日本の資本主義的経済機構にも関係することである。日本の科学技術が欧米なみに発展しない限り、日本の経済は成立しないことが確かなものとされるようになって、はじめて大学の研究が民主的なもの[●]に変わってきたのだと言って良いと思う。科学技術の発展というものは学問の自由と独立が無ければどうにもならないからである。

戦前戦中でも学問の発展が自由の上に立つこ

とを強調した人はいくらもいる。亡くなられたが真島利行先生は阪大総長としての講演の中でそのことに言及されたことを私は忘れえない。私は戦後何年かして自分で仕事のテーマを考える立場に立ってから、幸いに他人の言葉や要請で研究をした、という記憶がない。どの研究室でもそうだろうと思う。どこかで自由から離れた研究を押しつける人がいるなら、その大学人はその人自身が曲がっている[●]ので、大学が企業や軍の圧力で何かの学問を曲げるということはねつけることが可能のことである（私は自然科学系、ことに化学のことしか身に経験していないので、人文科学ではまた違ったことがあるかもしれないが、原則としてこのことは間違っていない、と思う）。そしてこの学問の自由と独立は今後も守りぬかなければならぬことである。

私が今、言っていることは、個人がしっかりして居るなら、大学で学問を学び、学問をすることが、できるということなのだ。

そして次に言いたいのは、学問が細分化し、しかも各分科ごとに連絡を必要とする、この時代に「独学」を大学の外ですることが可能かということである。誰かがどこかで語学をマスターし、卒業して外国作家についての文献を集め自分の考え方をまとめて「作家論」をしあげるようなことはできる。大学で動物学を終了してから、蝶を集め分類することはできる。

しかし分子生物学について何か一歩をすすめることができるか、炭酸ガスの分子が曲がっているのか、まっすぐなのか、を大学や研究所以外できめることができるか、ガロアは17才で数学上の大きい報告を書いて、フランス革命の中で死んだ。しかし現在誰か大学外に偉大な数学者がいるのか。私がどんなに学問が好きでいて

も、道楽のつもりで、化学はやれはしない。1つの組織に属して、莫大な費用で装置や何やかやを備えつけることが先ず必要になる。大学を御用学問の場などと言う人は学問を自分で苦しんだことの無い人だろう。

たしかに大学には学問と関係のない、ただの「いばり屋」や「政治屋」もいる。あるいは多すぎるくらい実在すると言っていいかもしれぬ。学問というものは気楽に、のんびりとやれるものではない、と言えそうに思う。学問には献身というほどの、けわしいものがある。人々の税金を只づかいしている人たちの遊び場では絶対にない。大学は学問の場であり、それを実践するのは、そこに存在する人たちである、ことを確かなものにしたい。

私はいかにも自明のことを言っているようである。しかし、大学を1つの「権力の機構」とみなし、学問が「権力の寛大さ」の中で行なわれている。という見方のあることも確かである。国公立の場合に、その事は完全に否定しえない。例えば6、7年前に大阪市議会の自民党係の人たちは「阪市大が左に偏向している、それを正さなければ予算を削る」と声明したことは、そのことの端的な表現であったろう。また新しい筑波大学案の中にはそのにおいが大へん強い。今でも文部省は大学が上申した学長や当部長を拒否しうる権限があると声明している。

権力が学問に直接に手を触れると、学問は成立しなくなる。とびはなれて、凄い事例はヒットラーのドイツや東ヨーロッパで示された。みすず書房の「七命の現代史」(全6冊)は、その故にドイツを含む東ヨーロッパやイタリアの学問が高い水準を見るまに失い、当時の民生主義国家であったアメリカの学問が立ち上って行く姿をこくめに画いている。

いま人間は、とくに日本に於てと言っていいかも知れぬが、公害やエネルギーと食糧の欠乏の近ずきや繁栄のもたらした精神的ひずみなどのために、存続できるか否かをさえ、あやぶまれる時代をむかえている。そしてその大きい部分を受けもって支え、一切に立ち向い、人間を生きつづけさせるものは、究極に於て学問を中

心とした人間の働らきだけである。いま学問が自由と独立とのかなめを失うことはできない。その根本として、「学問する」ことを失えば人間の希望は無いとさえ言いうるであろう。どうすれば大学を守りうるか、をとくに大学人はじっくり考えねばならぬと思う。

大学は現在すでに、上述してきた原則的な理想の線にのみ沿っているわけではない。いろいろの不合理の線をかかえている。大学の中の身分制(ヒエラルキー)は学問自体とどう考えても一致しない。同時に学問への献身を否定し、学問をわざわざ「大したものではなく、権力機構への奉仕物にすぎぬ」と小さく考えて、自分を疎外して行くことも、非論理的で、むしろ敗北主義的でさえある。

大学は究極的には人間のためのものである。そのために学問があるのだから、それは事実だが、そのことに甘えるのは卑小だと思う。大学外の人々に啓蒙的な運動をして行くことは大切な仕事にちがいないが、学問の高さに貢献することは大学人にとって直接には関係がない。

カリキュラムの問とは大きいですが、それはここでは省略する。

私はいま私学にいて、授業料の高さに既歎している。国立の大学生にくらべて、私学の大学生はむしろ貧しい。こんな不公平が許されているのか。大学における学問の自由と独立というものと、これは無関係ではない。おうらかな民主主義というものは人間が平等であるとの原則に立つが、そういう原則を大学の中で無視しておいて、その上での「大学の自治」を呼ぶことは筋がとうらない。このことに関連して(研究費の配分をも含めて)いわゆる一流国立大学のみにくい利己主義的ふるまいを人々はどうか考えているのだろうか。

いま国公立は第三国人の教官任用を肯んじない。それは学問の自由、民主主義の原則にもとづく「学問する」とことと反しないのか。

学問は大学とともにあることを述べたのだがその現実を私たちは見つけ、この激動の時代を学問によってのりきって行きたいとしみじみと考えるのである。